



## 仁井国雄

女子中高  
国際高校  
元校長に聞く

## 自由と国際主義の学園

聞き手

河野 仁 昭

### 三度拾った生命

仁井先生は京都のお生まれでしょう。

仁井 いや、香川県琴平町（大正十一年六月四日生まれ）。金比羅さんです。戸籍は京都へ移しましたけれど。

旧制三高そして京都ご卒業でしょう、中学までは香川で……。

仁井 六歳のとき京都へ移ったんです。父がタオル工場やっついて失敗して西陣へ移って、ぼくは西陣小学校に学びました。昭和九年の室戸台風で校舎がつぶれましたね。ぼくが六年生のとき……。仲間が四十数人死にました。

——そんなひどいことがあったんですか。校舎が古かったんですね。

仁井 半分だけ鉄筋コンクリートに改造して、あとの半分は木造の二階建てでして、それがこわれたんです。ぼくは木造の方にいましたのでね、危うく死ぬところでした。

——京都は他の学校なども被害があったんですか。

仁井 ありました。小学生だったから詳し

いことは憶えていませんけれどね、先生も生徒も沢山亡くなりました。

——そうですか、私など鴨川の橋がみんな流されたというくらいなことしか知りませんでした。

仁井 それから中学生のとき、昭和十三年か四年ごろに満州国皇帝が京都へ来ましてね、八月でもないのに歓迎だといって大文字焼きをしたんですよ。したらそのあとで大洪水があつて……。

——大文字の祟り？（笑）

仁井 そうそう、そう言っていました。その洪水のときぼくらは馬鹿正直に中学へ行っただんですよ。

——中学というと府立第一中学校……。

仁井 そうです。

——そのころはまだ吉田にあったんですか。

仁井 いや、今の洛北高校の所へ移った直後でした。ぼくは西陣から出雲路橋を渡って歩いていったんです。学校へ行ってみたら配属母校が、「おつ、よう来た。けど今日は授業はないから帰れ」。

——大雨だからですね。



仁井国雄先生

仁井 仕方がないから鞆を下げて今きた道を帰って、出雲路橋を渡ったんですよ。そして、橋の上でも水が腰の辺まで来ているんです。

——橋は木造でしょうが、一人で？

仁井 木造でした。怖さ知らずというか、一人で渡った。橋といっしょに流されて死んでいてもおかしくないんです。

それから、もう一回死にそこなったというか、命拾いました。

——二度あることは三度ある(笑)。今度はどこで。

仁井 軍隊時代ですね、ぼくは水戸にいます。

——士官学校ですか。

仁井 航空通信学校というのがあって、そこへ将校学生として入っていましたね、アメリカ軍の空襲を受けたんです。軍隊は山へ疎開していましたけど。アメリカ軍は空襲する前にナマ放送するんです。「今夜十二時に水戸を空襲する」と、そういう放送が入ってくる。

——放送どおりにやるわけ？

仁井 やるんです。日本には飛行機がないから迎撃できないんです。山の上から見ていると、灯火管制で真っ暗の町へ、ちようど夜中の十二時になったら、B29の音が聞こえてきて、焼夷弾が火花みたいにパツ、パツ、パツとばらまかれて……。

——予告してからやるとは知りませんでした。

仁井 夜が明けたら、「スコップ持って、全員集まれ」という命令が出て、道路が通れるようにしに行っただけです。そしてあらここに人が倒れていましてね、一人のお婆さんが防空壕の上で、「兵隊さん、助けてくれ。この中に娘がおります」言っただけなんです。でも私たちの任務は道路の確保だからと言っているうちに、ふと気がついたらまわりは火

の海になっていまして。危うく死ぬところでした。

——よく助かりましたね。

仁井 本当にそう思います。あの娘さんはきつと防空壕の中で蒸し焼きになってしまったんでしょけど。

——まア、あれやこれやで、ぼくは何回も死にましたから、それ以後は余分の命で。(笑)

——余生ですか、お若いうちから。(笑)

仁井 いや、本当ですよ、余分の命という感じがするんです。三度も失くした命だからと思って、今後は生きようと。

——世の中や人のために……。

仁井 まあ、そうです。

#### 同志社女子高校へ

——先生は、京大の経済学部ご卒業ですね。

仁井 父が、法律よりも、生きて動いている経済を勉強せよと言っていましたね。

——私はつきり農学部のご出身かと思っ  
ていたんですよ。静和館の前に花壇があった  
でしょう、「これ、だれが手入れしているん  
ですか」と人に尋ねたら、「仁井校長先生」と教



仁井見習士官 (1945年)  
裏面に「千島列島出動直前(死を決して)」と書かれている

えられましたんで(笑)。卒業生からも「私たちが生徒のとき、校長先生が花をつくってました」と教えられました。

仁井 あの花壇はむかしからありましてね、杉原(正三)という体育の先生がやっておられたんですが、だいぶん年をとられたので、「先生、よくやりますわ、好きだから」といって交替したんです。出町のタネゲンへ苗を買いに行きましてね。

——京大ご卒業は昭和二十一年九月。

仁井 繰り上げ卒業です、高校も。在学期間が半年ずつ短いから一年間、勉強しないで卒業したわけで、なんだか生徒たちに申し訳

ない気がしましてね、「あんたたちはちゃんと勉強できるようになっているんだから、しっかりやりなさい」言いましたね。

——卒業してすぐ同志社へ?

仁井 いや、大阪の酒井工事株式会社へ就職しました。松下電気が松下貿易という会社を作りまして、その方も受かったんですが、酒井工事の方が先に決まっていたので、先に決まった方へ行くことになっていましたから。

——なにをする会社ですか。

仁井 発電所の水圧鉄管を作るのが専門の会社でした。信州の山奥などで発電所を作っている現場へそれを運んで行きましてね。

——先生も?

仁井 いや、ぼくは経理でしたから、現場へ給料を届けに行きました。秋でしたから、とてもよかったですよ。だけど、会社勤めというのはどうも性に合いませんでした。それに、よくいわれる戦後の虚脱状態で、教会へ行ってみようと思いましたが、精神的なやすらぎとでもいうか、そういうものを求めているんです。

——教会というと、どこの?

仁井 西陣教会です。ぼくは西陣に住んで

いましたから、子供のころ西陣教会の日曜学校へ行っていたんです。堀川今出川上った所にありましてね。今度理事長になられた野本先生のお父さんが牧師で。ぼくの家へも姉の家庭教師に来て下さっていたんです、神学生のころに。

——同志社とのつながりがあつたんですね。

仁井 会社に勤めるようになって行つてみましたが、堀川通りが二倍も広くなつていて、教会は移転していました。移転先を知らないものだから、この近くなら同志社がある、同志社はキリスト教の学校だから教会もあるだろう、行ってみようというわけ。

——そのころも栄光館で。

仁井 クラーク記念館の二階に広い講堂があつて、そこが教会になっていました。

——今は小教室になってますけど。牧師さんは?

仁井 茂義太郎先生でした。会社に勤めながら何回か通っていましたら、「洗礼を受けなさい」と言われて、昭和二十二年の三月に受けました。あとでわかったことですが、いまの同志社教会の佐伯(幸雄)牧師が同志社中

学の生徒で、いっしょに受けたんです。あのころはキリスト教がブームでしたから、十数名がいっしょに洗礼を受けました。

——国立大学出身の会社員がクリスチャンになるというのは、あまり例はないかもしれないけど、精神的にも思想的にも虚脱状態というか、混乱状態だったから、仁井先生のような方もおられたんですね。

仁井 まア、ブームのような時代でしたから。それで、洗礼を受けて通っていましたが茂先生から、女子高の先生をしてくれないかといわれたんです。

——昭和二十二年ですか。

仁井 二十二年は女学校が新制の女子中学になった年で、その翌年です、女子高校ができたところで。ぼくは会社勤めはあまり性に合わなかったので、先生をやる方がいいというわけで、「じゃあ、お願いします」といって。

——教員資格というのは、当時はどうだったんですか。

仁井 大学を卒業していたら知事が認定してくれました、経済学部出身だから社会学の免許ですね。それから英語の平均点が九十点以上あったら、英語の免許ももらえて。ぼ

くは九十点以上あったので、社会と英語の二つの免許をもらいました。

### 「時事問題」という科目

——女子高はできたばかりですから、カリキュラムとか科目担当者とか、大変だったでしょうね、きつと。

仁井 「時事問題」という科目がありましたね。

——社会科ですね。

仁井 そうです。その科目を担当する人がいないので、当時教務主任だった永島嘉三郎先生が困っておられたので、茂先生がぼくに、「女子高へ行かんか」と言われたんです。教員になって一週間ほどしたら、末光（信三）校長、石塚（多）教頭、永島教務主任の三人が

ぼくを校長室へ呼ばれましたね、「仁井さん、結婚してくれませんか、独身男性の先生はちよつと困るんです」といわれて。（笑）

——信じがたいようなお話で。（笑）

仁井 ぼくには意中の女性がいたんですが、その人の姉さんが白血病で死んだので結婚を延ばしていたんです。でも、学校の方は

早く結婚するようにというので、茂先生の司式で五月二十二日に結婚したんです。

——「時事問題」というのは新制高校になつて設けられた新しい科目でしょうね。私などの旧制中学にはなかった。

仁井 新しいんです。手引書のようなものもなかった。文部省はこういう科目も教えるようにというのでつくってみたんでしょうが、何をどのように教えるかもきめていないんです。だからぼくは、大学や高校で勉強した社会思想論とか社会思想史のようなものを教えましたね。生徒たちはそういう話を聞いたことがなかったものだから、非常に新鮮な感じがしたようです。いまでも卒業生から、「先生に時事問題を習いました」と言われますよ。

——こういうことは教えるなどといった制約はなかったんですか。当時はまだ占領中だったから、占領軍などから。

仁井 制約はありません。でも一度だけ進駐軍の将校、民生局次長のケイディスだったと思うんですが、二十人くらい連れて見に来ました、軍服を着て。ぼくも若かったから、ちよつと負けん気を出して、「たくさんのお客



女子中高時代の仁井先生と生徒たち

さんだけど、遠慮しないで自由に意見をいつて下さい」と生徒たちに言いましてね。何をしゃべったか内容は覚えていませんけど。

——監視に来たんでしょうか。

仁井 監視といえないことはないですね。そのころはヴァージニア・プランといって、アメリカのヴァージニア州のカリキュラムに沿ってやっていたんです。しかし、なんといっても社会が変ってしまっって、何をやるのも自由でした。ぼくは専任で四十年間やらしてもらいましたけれども、本当に自由に教えま

した。自由をやっても学校からもだれからも文句はいわれませんでしたしね。

でも、何をやってもよろしいというのは、かえって怖いですよ、責任がありますからね。だからかえって自重しました。

#### 女子中高の教育

——当時から礼拝は毎朝。

仁井 毎日ありました。あれが自分の信仰を支えていくうえでも役立ちました。ときどき奨励の担当が回ってきますしね。

——女子中高の経営状態はどうだったんですか。

仁井 財政的には黒字でした。川村あき先生に聞いたところによると、戦前戦中は志願者が少なくなくて、女学校の教員が手分けして小学校へ生徒をよこして下さいと頼みに行ったそうです。戦後は急に志願者がふえて、木造の新生館とか希望館などつくりまして、生徒を受け入れたんです。いまの建物ではないですよ、前の木造のね。

——その後も順調で……。

仁井 年によって違いますけどね、定員二

五〇名で二六五名ぐらいしか来なかったり。それに今いいからといって、慢心していたら、いつ何が起るかわかりません。

——進学年齢人口が急減していますし。

仁井 そうです。それで女子中高ではかなり早くから小学校の校長をお招きして懇談会を持つたり、ぼくが校長を辞める直前ごろから一般の先生や保護者にもきていただいて、入試説明会を持つようになりました。そういうことはいまではどの学校でもやっていることですけどね、常に気を引き締めてやっていると危いんですからね。

——先生はよく教務主任をしておられましたが、入試のこととかご苦労が多かったのではないですか。

仁井 自由選択制でしたから、「聖書」を除いて、各自に時間割を組ませたら二二〇通りぐらい組み合わせが出て来ましてね、その教室配当とか時間割編成に毎年苦労しました。科目によって偏りがあるでしょう。

——自由選択制にしたなら、どうしてもそうなりますね。

仁井 この科目は二十名しかないのに、こちらの方は七十名もいる。しかし、各自の



女子中高校長時代—花壇の手入れ

希望をかなえてあげようと思えば、偏りがあっても仕方ないですからね。高校一年生は自由選択など初めての経験ですから、喜びましてね、一人前扱いされたようで嬉しかったと、卒業してからもよく言いますね。

——「聖書」以外に必修はないんですか。

仁井 それはあります。「英語」「数学」などですが、二十数単位は選択でした。その後、推薦入学の志望学部の関係でちよつと変わってきましたけどね、工学部へ入学するに

は何と何をとっていないといけないとか、家政学部だからどうか。

——推薦入学も、志望学部の受け入れ交渉

とか、学内高校間での人数の割り振りとか大変なんでしょう。

仁井 それは昔のことで、今はかなり楽ですよ、受け入れ総数なども決っているようです。推薦入試にはむずかしい問題がいまも全くないわけではありません。しかし生徒たちにとつては公立高校のように受験勉強をしなくてもいいという点でも、ものすごく有難いことですよ。

ぼくは三高や京大のことはあまり言いたくないのですが、旧制高校では生徒が本を自由に選んで読んで、そして考えましたね。あれはいいことだから、何かまとまった本を選んで読んでほしいと思ったので、生徒たちに希望の本を書かさせてね。

——図書館の図書選択に使うわけですか。

仁井 いいえ、買ってあげるんです、ぼくが。

——ポケット・マネーで？

仁井 そうです。十五人だけ抽選で選びまして、当った人の本を買ってきてあげるんです。

す。七年か八年続けたでしょうね。

——図書館を利用させたらいい気がしますけど。

仁井 図書館のは返さねばいかんでしょう。それに、生徒にあげる本には、ぼくがそれぞれ何か書いてあげるから、大事にしてくれるんですよ、「あのとき、これもらいました」言つてね。でも、それは公立ではきつと指導主事などに叱られますよ、勝手なことしたらあかんやないかと。同志社ではまア、他の先生方にはちよつと悪いですけど、それは個人の自由だから、そこが同志社のいいところですね。自由にしたらよい、そのかわり自分がやったことには自分が責任をとれというわけでしょう。

### 『同志社女子部の百年』

——そういうことまでされたということは全然存じませんでした。話は違いますけど、先生は『同志社女子部の百年』というのを、昭和五十三年に編集出版されたでしょう。あれは何か動機があつて……。

仁井 校長を辞めてちよつと時間ができた

ので『同志社女学校期報』のバックナンバーを見ていたんです。するととても貴重な資料が載っているんで、女子部創立百年の記念にこういうのを集めておきたいと思いましたが。武間(富貴)同窓会長からも、「たくさん写真があるから貸してあげましょう」と言って下さって。それで編集委員会をつくりましてね、社史へもしよっちゅう足を運んで資料を探していただいて。

—— 私など知らない資料も使っておられますね、「宣教師文書」とか。

仁井 マイクロフィルムになっていましたから、見ているとデイヴィスとかスタークウエザーとか創立当時のいろんな先生方が出てくるんです。そういうのを利用させていただいたり。創立九十年のときにも記念に出しているんですが、こういう資料は使っていませんでした。

—— 私たちにとっても有難かったです。

仁井 『女子部の百年』といっても女子大にはふれないわけですから、そのことは「編集後記」に書いておきました。

編集しながら初めて知って驚いたんですが、女学校は最初のころ、新島先生が考えて

いたような学校とは違っていたんですね。

—— と申しますと……。

仁井 アメリカン・ボードの宣教師たちの考えと新島先生の考えに食い違いがあったことが、「宣教師文書」を調べていたらわかったんです。宣教師たちは「同志社女学校」とはいわない、「キョート・ホーム」といつている。

—— 同志社英学校も宣教師たちは「キョート・トレーニング・スクール」と称していますから、女学校だけではありませんけれども。

仁井 そうでしょう、そのところは新島先生のお考えと違うんです。

—— アメリカン・ボードが金も人も出してつくったミッション・スクールだと宣教師たちは思い込んでいたのとちがうでしょうか。

仁井 そうだと思えますね、「宣教師文書」を読んでみると、ところが八重夫人なんかがつかりしていて、スタークウエザーやパーミリーなどの思うように運営ができない。そこでトラブルが起こったり……。新島先生もアメリカン・ボードから給料もらっておられるでしょう。

—— はい、額は知りませんが。

仁井 だから宣教師たちにしてみれば、同

志社はボードの学校だと余計思いますね。ぼくは非常に複雑な気持ちにとらわれまわしてね。まあ、その後、同志社の事情もわかってきたからだと思いますが、だんだん手を引いていきますね。

—— 明治二十一年九月に社員会が決めた「同志社通則」が公表されるんですが、そのころからでしょうね、宣教師たちも「ドウシヤ」というようになりまして。その過程には大沢善助さんなどの働きもありまして。

仁井 大沢さんは財政面で一生懸命女学校にも奉仕されましたね。今出川通りに沿って立派な松並木が今もありますけど、あれも大沢さんの寄付でしょう。

—— そうですね。

### 国際高校の創立

—— 国際高校をつくろうというのは、上野直蔵総長の発案なんですか。

仁井 発案かどうかは知りませんが、同志社商高が廃校(一九七六年)になって、その学校の教員の処遇が問題になったあとです。土山(登)先生や横田(守)さんが準備



国際高校校長時代

を始められました。そして、国際高校の校長には仁井さんがいいと、土山先生が上野先生に推薦されたんじゃないかと思うんです、確かなことは知りませんが。それで上野先生と呼ばれて、「国際高校をつくるので、校長としてやってくださいませか」といわれました。

仁井 —それが始まりですか。  
 仁井 —そうです。そのときはまだ、国際高

校といっても海のものとも山のものともわからない状態でした。土山先生は最初から一緒に中学もつくらねばいかんというお考えでした。財政的にそうでないかとやっていけないんです。でも中学は義務教育との関係で設置条件にむずかしい点があるわけです。

ぼくはいまでも覚えていますが、上野先生から、「仁井さん、推薦入学問題は白紙ですよ」ということと、「どの学校からも財政的な援助は一切ありません」と、二つのことをはっきりいわれました。

—きびしいですね。

仁井 はい。でもまあ、白紙いうことは将来においても絶対にだめということではないわけだから、なんとか頑張って推薦を認めていただくようにしようと思わしてね。

—財政的な援助は受けられないという……。

仁井 国庫補助もありますけれども、当初の建設費から年間の総需要費をそれで全部まかなえるわけではないですから、赤字を消すことは非常にむずかしいわけです。

—創立当初はいろいろご苦心があたりだつたろうと思います。今も財政問題ではそう

いうことで……。

仁井 最初の志願者募集からして、いまでは笑い話のようなことですけどね、「さあ、今日から願書の受け付け」ということで、福島さんらと机を並べて段取りをしましてね。

—受け付け場所はどこですか。

仁井 田辺のプレハブでした。机を並べて「ここで受け取って、書類をこちらへ流して、内容を点検して」というふうにかけていたんです。そうやって段取りしていたのに、一人も来てくれなかった。(笑)

—歴史のある女子中高のようなわけにはいかなかったんですね。それにしても、一人も来ないとは。(笑)

仁井 その日の終わりがけにやっと一名来て。(笑)

—それでぼくたち相談しましてね、「一体、帰国生徒はどこにいるんだろ」(笑)。いろいろ調べているうちに、九州に多いらしいということがわかってきて、それじゃアということ、九州各県の小・中学校の校長先生あてに手紙を書きましてね、入学案内状を送って、それはもう大変でした。

—同志社国際高校ができたとき、日本に

はまだそういう高校はなかったんですか。

仁井 ありました、うちは遅い方です。一番目が東京学芸大学付属高校大泉学舎で、私立ではICU（国際キリスト教大学）の付属高校と暁星高校にありまして、この三校が文務省から補助金をもらっていました。だからうちは四番目です。上野直蔵総長がいろいろ努力されて、建築費を補助していただくとか。——カリキュラムなどはそういう先輩から学んだわけですか。

仁井 ICUからいろいろ教えてもらいました、何回も足を運んで。ICUの校長先生、教頭先生はうちの恩人ですよ。

カリキュラムで思い出すのは、文部省の方と折衝していましたとき、「国際理解という科目を置きたいと思います」と言っただけです。そしたら「そんな科目は学習指導要領にないから駄目です。実験校に指定されたら置くことができます」というわけで、結局、学習指導要領に従ってやるしかなくなりましたね。

### 国際主義の伝統と国際中高

——ご苦心は絶えなないのではないかと思ひ

ますが、一九八八年には念願だった国際中学も併設されましたから。

仁井 さつきも言いましたが、あれは土山先生の最初からの持論でしたからね。中高というのは一五〇〇人の生徒規模でなければ収支が整わないんですよ。いま、中学は一年生が九十人ですから全部で二七〇名でちょうど少ない。五〇〇人ほどあるといいんですけどもね。でも、全くないよりはるかにいいわけです。

——生徒募集に毎年、手分けして海外へも行っておられるんですね。

仁井 世界各国に日本人がいますから、東南アジア、ヨーロッパ、アメリカと分けまわしてね。行ってみて非常に嬉しいし有難いのは、どこの国へ行っても同志社女学校、女子中高の卒業生がいることです。

——そうですね、どこの国にも。

仁井 います。ぼくが覚えていないような卒業生までが宿舎へきてくれたり、会場の設営を下さったり、そりや実に有難いですよ。同志社はすごいなアと思いますね。

——その辺やはり、創立以来の国際主義の伝統が生きているという感じですね。英語の

力も一般的にいってレベルが高いし、外国人、外国文化に異和感を持たないし。

仁井 ぼくが教えた人の子供さんが国際中高にはたくさん入ってきています。とにかく世界中どこへ行っても卒業生がいるんですから、やっぱり大同志社ですよ。

いま、国際中高には「国際父母の会」というのがありますが、役員さんはみんな女性です。

——指名ですか。

仁井 いや、立候補制で。男性はいませんが、みんな女性。先代の会長さんはぼくの教え子です。

——世界にはばたく同志社ウーマンの代表みたいな感じで。(笑)

私は教えた話したりした経験があります。私が、帰国生徒とそうでない生徒に違いがありますか。

仁井 みんな日本人ですから、本質的にはそう大きな違いはないですね、日本語もちゃんとわかっているし、でも、面白い経験をしたのは高三の授業を持ったときでした。たとえば「明治維新というのがあって」とぼくがいうでしょう、すると「先生ちょっと待って、

なんで明治維新があつたの？」と質問する生徒がいる。それで「それはこういう人物がいて」と答えるでしょう。すると別の生徒から「なんでその人でないといけないの？」(笑)。質問の続出で、話が進まないわけです。(笑)——基礎的な日本歴史教育がなされていないからでしょうか。

**仁井** 日本史に限らないので……。まあ、多少そういう点もあるでしょうが、教育の仕方の違いが大きいですね。アメリカだと手をあげて質問したり答えたりしない生徒は駄目だと、教師が評価するんです。だから質問などどんどんした方がいい。ところが日本では、指名したらちゃんと答えられるのに、手をあげて進んで答えようとはしませんね、特に女の子は周囲に気兼ねして。

——なるほどね。

**仁井** 帰国生徒といつてもみんながみんな優秀とは限らないし、世界各国から帰ってきたいろんな生徒がいますから、そういう生徒たちに応じた教育をせねばならない。そのところに気を使いますね。

——寮を作って受け入れるというのも、現在では国際中高ならではのですね。

**仁井** あれは生徒募集にロスアンゼルスへ行ったとき、お母さん方に囲まれて、「生徒の寮はありますか」といわれたものですから、「来年つくる予定です」と答えました。そして「なに言ってるんですか、寮がなかったら、私たちの子供はどこに泊るんですか、早くつくりなさい」といわれて。とんで帰って来て国際高校委員会に「すぐつくと駄目ですよ」と申し上げましたら、「じゃ一年繰り上げてつくることにしましょう」と、突貫工事でやっていただいたんです。

——寮がないと具合が変わるんですね。

**仁井** 寮のほか図書館とか。保護者が図書館を見て、「これは全くむこうと同じです」と言いますね、すべて開架式で、ずらりと英語の本が並んでいます。

それから国際には三つしか指導方針がないんです、「酒飲むな、たばこを吸うな、法律を守れ」これだけです。そのほかは生徒の自由。——新島の時代もそうですね。

**仁井** 自由は同志社の伝統ですからね。それと国際主義。だからぼくは、同志社が国際中高をつくったのは本当にいいことだったと思っています。

——初代校長としてご苦労も多かったことと思います。長時間どうも有難うございました。

(一九九四年一月十二日 社史資料室長室にて収録)